特別講演

マダニとリケツチア症のインターフェイス
 藤田博己 (大原綜合病院・大原研究所) Ticks-rickettsioses interface Hiromi Fujita 日本におけるマダニ関連リケツチアについては、1959年の斉藤 豊先生が報告したヤマトマダニ由来のリケツチア様小体の報告が最初と思われる。この小体はしばしばマウスに致死性肺炎を起こしたとされ、マウス腹壁上皮細胞での増殖が認められている。この小体のその後の研究については不明で、以後国内におけるマダニ関連リケツチアの研究は途絶える。1980年代に入ってから、紅斑熱群リケツチア症 (のちの日本紅斑熱) の発見を契機に研究が再開された感がある。紅斑熱に関連して、まだ少数の研究者によってではあるが、媒介マダニの調査が各地で行われており、当該病原体 *R. japonica* を含む紅斑熱群リケツチアの検出例が累積されつつあり、本群リケツチアの分布は、南西諸島の一部や北海道にまでおよぶことがわかってきた。ただし紅斑熱患者の発生地域は、これまで千葉県以南に限られており、マダニ類からの *R. japonica* の検出では、神奈川、徳島および高知からの陽性例が知られているのみである。一方では、最近確認された別種の紅斑熱群や *Ehrlichia* 属のリケツチアの存在は、国内における不明リケツチア症の潜在を示唆する。

2 間接赤血球凝集抑制反応による動物腐乱遺体の野兎病簡易検査法 藤田博己 (大原綜合病院・大原研究所) An indirect haemagglutination inhibition test as a simple method for detection of tularemia polysaccharide antigen from decomposed samples Hiromi Fujita 野兎病菌の多糖体は特異性の高い抗原活性を示す。そこで、多糖抗原感作ニワトリ赤血球による間接赤血球凝集抑制試験を用いて、動物腐乱遺体における野兎病菌感染の簡易検査法を検討した。動物モデルとして、野兎病菌を投与して発病死させたマウスを用いた。死亡マウスは室温に放置して、十分に腐敗した時点で肝・脾を採取した。臓器からの抗原抽出は、Ascoliの熱沈降反応での方法にほぼ準じ、磨砕後、4倍量の生食水で乳剤とし、15分間煮沸後に遠心、上清を回収した。反応はマイクロプレートによる微量法で型通り行った。本法による抗原検出では、臓器の腐乱の有無にかかわらず、感染個体からの陽性結果が得られた。また偶発的にケブカクロバエに産卵された個体があったので、終令幼虫、サナギおよび羽化成虫についても抗原検出を試みたところ成虫以外で陽性であった。

本反応は野外の動物遺体の野兎病検査にも応用可能なものと思われる。

一般講演

1 北海道におけるハチ刺傷による死亡事例の検討 ○猪股 寛 (北海道帯広保健所)、高橋健一 (北海道衛研・医動物) Analysis of fatalities caused by hornet stings in Hokkaido. Inomata H. and Takahashi K.

北海道では、1995年8月に旭川市でハチ刺傷による死亡事故が2年ぶりに発生し、1996年8月には3件の死亡事故が連続して発生した。また、1986年には7名がハチ刺傷で死亡している。そこで、これまでに北海道で発生した死亡事故のうち20例について、その発生状況、原因種等についてまとめた。これら20例は全て男性で、年齢は20代1例、40代6例、50代6例、60代6例、80代1例であった。事故発生時期は8月が最も多く12件で、次いで9月4件、10月2件、そして、6月、7月がそれぞれ1件であった。刺されたときの状況としては、農・林作業時が6件で最も多く、その他キノコ採り4件、道路工事3件などであった。なかには、駆除したハチの巣を自宅に持ち帰り、その巣から出たハチに刺された事例もあった。刺された部位では、顔面・頭部・首を刺されたものが14例、四肢が4例、躯幹のみの刺傷は1例であった。また、8から10数カ所を刺されたものが4例、2カ所を刺されたものが4例あった。原因のハチが入手でき、種名が特定された事例は5例で、ケブカスズメバチ2例、オオスズメバチ、クロスズメバチ、シダクロスズメバチ各1例であった。

3 北海道におけるダニ媒介性脳炎の疫学調査 高橋健一、伊東拓也 (北海道衛研・医動物)、竹田努、高島郁夫、橋本信夫 (北大・獣医・公衆衛生) The epidemiological study of tick-borne encephalitis in Hokkaido. Takahashi K., Ito T., Takeda T., Takashima I. and Hashimoto N.

1993年に北海道渡島支庁管内でダニ媒介性脳炎 (TBE) 患者が発見され、さらに、1995年には患者発生地区に生息するイヌからTBEウィルスが分離された。そこで、この地域に生息する小哺乳類およびダニ類におけるTBEウィルスの侵淫状況調査を行っている。1996年4月下旬から6月上旬に調査地の植生上から旗ざり法によりマダニ類の採集を行った。その結果、採集個体1183匹中、ヤマトマダニが1173匹で全体の99.2%を占めた。その他は、タヌキマダニ7匹、シュルツェマダニ1匹、*I. sp.* 1匹、キチマダニ1匹であった。ウィルス分離を目的としてヤマトマダニの成虫600匹 (オス300匹、メス300匹) を雌雄別に20匹ずつ1プールとして乳剤を作成し、1日齢の哺乳マウス脳内に接種した。その結果、30プール中メスの2プールからウィルスが分離され (最低ウィルス保有率は600匹中2匹で0.33%)、単クローン抗体を用いた蛍光抗体法によりTBEウィルスと同定された。